

<表紙記載項目>

2022 年度 帰国隊員支援プロジェクト 実施完了報告書
(協力活動 / 調査・研究)

提出日:2023 年 08 月 16 日

氏名: 小柳真裕

プロジェクト名称: 教材を通じてのカンボジアの幼児教育サポート

実施国: カンボジア

実施期間:2022 年 07 月 01 日～2023 年 06 月 30 日

1 活動実施内容概要

ポーサット州内、4つの市、郡から 10 校 13 クラス 14 名の教員、ポーサット州教育局幼児教育課課員 5 名、4つの市、郡の幼児教育課課員 4 名、計 23 名とパートナーになり活動した。

主な活動は以下の6つである。

- 1) カリキュラムに沿った教材作り
- 2) 幼稚園教員ワークショップの開催
- 3) 各学校へのフォローアップビジット
- 4) 教材サイトの充実化
- 5) アクセスボックスの設置
- 6) ブックフェアへの参加

2 活動の結果・成果

1) カリキュラムに沿った教材作り

この 1 年で、1つのオリジナル絵本の教材パッケージと教室用の装飾教材パッケージを完成させた。また、それ以外に、過去の教材アップデートや、教員から要望のあった工作ビデオやワークシートなど、計 823 点の教材を完成させた。これらを作成するにあたり、各スタッフの役割分担が明確になり、それぞれの強みを生かしながら教材を効率的に作成できるようになっている。

2) 幼稚園教員ワークショップの開催

計 4 回のワークショップと 1 回の年末報告会議を行った。各ワークショップでは、絵本の教材パッケージの紹介と実践、教材ウェブサイトやアクセスボックスへのアクセスの仕方、教案の書き方、国が定める教室内装飾の説明と作成、そしてパソコンを使った教材づくり方法などを紹介した。

ワークショップには、教員だけでなく州や郡の幼児教育課課員も参加し、教員の年齢や経験数も様々である。そのため、最初は発言することを躊躇する教員が多かったが、回を重ねるごとに、課員や教員同士の絆が生まれ、誰もが発言しやすい雰囲気になり、情報共有がしやすい場になったことがワークショップの成果のひとつだ。

また、実際に自分でやってみる、ということが教員の実際の教室活動の中で役立つことがわかった。もちろん、教材サイトで自分で勉強することもできるが、実際に自分の手や体を使っ

て経験したことのほうがはるかに身に付き、授業に取り込みやすい。オンラインではないワークショップの大事さを再認識した。

また、パソコンを使っの教材づくりを紹介し、自分でも作れるという経験を得たことが新たな自信につながり、もっと自分でやろうという教材作成意欲を駆り立てているように感じる。

3) 各学校へのフォローアップビジット

各ワークショップ後に各学校を訪れ、ワークショップ内容のフォローアップを行った。ワークショップで終わらせるのではなく、実際に教員と再度話すことによって、ワークショップの改善点や教員からの声が届きやすくなり、私たちの活動をより意味のあることにすることができた。また、教員とのつながりも深くなり、いい関係性が作れている。

4) 教材サイトの充実化

過去数年間、多くの人々の協力を得て、教材サイトの開発を進めてきた。2022 年 7 月のワークショップに合わせて、第一段階の公開が実現した。教員からはサイトが見やすく使いやすいという好評を得た。しかし、動画が多いためサイトの速度に課題があり、全教材のアップデートや改善を進めている。

サイトの内容については、新しい教材を積極的に制作し、カンボジア国内で最も内容豊富な幼児教育専門のウェブサイトとなっている。また、教員が自身で作成したワークシートもサイトで共有している。現在は私たちが教材をアップロードしているが、将来的には教員自身がアップロードできる機能を追加したい。

サイト自体は、月に 5000 人以上のアクセスがあり、ページビュー数も月に約 20000 件に達した。また、YouTube や Facebook などの SNS でもシェアしており、パートナー教員以外の教員や保護者にも広く利用されている。

5) アクセスボックスの設置

教材ウェブサイトインターネットを介さなくても利用できるよう、各学校にアクセスボックスを設置した。教員は自分の携帯電話からのインターネットを使用しなくてもよいため、スピードに安定性があり活用していたが、停電や電力の不安定さから動かなくなってしまう学校が多く、現在は、さらにアップデートの問題などもあり、改良版を試行錯誤中である。

6) ブックフェアへの参加

2022 年 12 月に首都プノンペンで開催されたブックフェアに初めて参加した。来場者数 10 万人以上という大きなイベントで、私たちのブースへも 500 人以上の人が足を運んでくれた。販売目的ではなく、私たちの教材や教材サイトの周知が目的であったが、たくさんの人から購入したいという要望があり、今後の団体の持続性のためにも、絵本を自分たちで出版できるよう機材を購入するきっかけとなった。

プノンペンでのブックフェアは 2023 年 3 月にも参加予定だったが、開催情報が出るのが遅く計画できなかったため、代わりに日本の東京、代々木公園で行われたカンボジアフェスティバルに参加した。日本でクメール語を学習している人や、日本へ研修に来ているカンボジア人に対する教材サイトの周知はできたが、絵本や教材の販売という意味では、カンボジアフェスティバルは来場客層が前出ブックフェアとは違っていた。

他にも、カンボジア国内で、隣の州のバタンバンでイベントで絵本の販売を試みてみたが、絵本を子どものために買う、という習慣が地方ではまだまだ浸透しておらず、首都と地方の教育意識格差を実感した。

3（申請時に）期待された成果と実際の相違点

この活動の一番の目的は、パートナー校の教員が地域の幼稚園教員リーダーとなりカンボジアの幼児教育を発展させていくことである。継続的な活動であるため、この 1 年だけの成果ではないが、この 1 年で行った 4 回のワークショップの中だけでも、教員の成長を強く感じることができた。

特にパソコンを使って自分で教材を作ることにに関して、ほとんどの教員が貪欲に学びたいという姿勢を見せてくれ、また実際にワークショップの中で作ったものだけでなく自分で改良して作り、他の教員とシェアをしあうという、私たちから教員へ、という一方通行の矢印だけでなく、教員同士、教員から私たちへという双方の矢印が実感できた。特に村の幼稚園教員の成長が著しく、目標としていた公立幼稚園化が実現可能になったように感じる。また、教材ウェブサイトや SNS を通して、教材要望のメッセージや問い合わせが多くあり、登録者数も増えており、期待していた以上のカンボジア全体からのニーズを実感できている。

4 活動成果の持続発展性

今のパートナー教員たちとはこの年内(2023 年)は一緒に活動していく。その後、私たちのプロジェクトは卒業になるが、Telegram のグループは今後も活用していく予定で、今後も教員のアイデアの共有の場として活用してもらおう予定だ。また、来年からは新しいパートナー

教員と活動していくが、今回の教員にもアドバイザーとしてサポートしてもらう計画も出ている。また、ウェブサイトやSNSを通じた教材の発信は今後も続けていくため、今後ますますカンボジア全土の教員や保護者に教材を利用してもらえるように努める。

5 苦労した点、反省点、本活動を通じて得られたこと、学んだこと、教訓等

この活動を始めて、8年がたとうとしている。はじめの頃は協力隊時同様に、草の根活動として実際に自分の足を運び活動していたが、コロナ禍を機にその機会が一気に減っている。また、活動が大きくなるにつれて、スタッフの数も増え、教員と実際に活動するのは私ではなくスタッフに移行してきており、スタッフのサポートをオンラインでというスタイルが主になってきており、カンボジアとの距離が遠く感じることも多かった。

しかし、今回またカンボジアで活動させてもらうことができ、実際にスタッフや課員、教員と接する中で、離れていたからこそそのスタッフの成長を実感でき、また離れていてもスタッフを通じて教員とつながることはできるのだとモチベーションをあげることができた。何より、教員からのフィードバックにより、スタッフが自分たちの仕事に喜びを感じ、誇りを持ちながら働いていることを感じる事ができ、とても素晴らしいチームとして働けていることに感謝している。

同時に、現地で一緒に活動するというのはやはり何にも代えられない特権であり、信頼を得るためには必要なことだということも実感したので、今後もカンボジアの地に根差した活動もしていきたい。

6 自身の今後のプラン、及び本活動の活用予定・計画

今後もこの活動を現地とオンライン、両面から続けていく予定である。特にこの1年は私たちの活動がカンボジア国内だけでなく、国外でも認知され始めた。メインのドナーであるロータリークラブカルガリーダウンタウンの方々からは、今後もこの活動をサポートし、発展させていきたいというありがたい言葉をもらっている。カンボジア国内で、私たちのような活動をしている団体はめずらしく、ポーサット州の教育局からも大きな期待を寄せられている。

現在決まっているのは、来年(2024年)から2年間、規模を拡大して新たなパートナー校の教員たちと一緒に活動することである。その中で、団体のさらなる成長と教員とのつながりを拡大させ、今後もカンボジアの幼児教育全体に貢献していきたい。